

## エッセイ

## 楽しい“虫音楽”の世界

(その20 日本民謡の中の昆虫)

## 昆虫芸術研究家

柏田 雄三 (かしわだ ゆうぞう)

田中健次著の「図解日本音楽史」(東京堂出版)によると日本民謡は約5万8千曲もあって、日本歌曲の中では約7万曲の校歌に次ぐ多さだそう。民謡は場面や目的から労作歌、神事歌、芸ごと歌の三つに大別され、そのうち労作歌が80～90%を占める。労作歌とは仕事の歌、神事歌とは神事・行事・生活に関する曲、芸ごと歌は放浪芸人の歌で、以前取り上げた「虫送りの曲」は神事歌に分類される。民謡をすべて聴くのはとてもできない相談なので、昆虫に関係した曲のことを書こう。

まずは宮城県の代表的な曲の一つ《長持歌》である。「蝶や花よ」と育てた娘をお嫁に出す歌詞で、結婚披露宴でも歌われる。花嫁行列で長持<sup>たんす</sup>箆<sup>す</sup>を担いだ人たちが唱う曲だが、土方鉄は「芸能入門・考」(明石書店)で嫁入り道具を持たせてやれなかった親がこの歌そのものを贈ったのだと書いている。曲が哀調を帯びて聞こえるのには、娘を嫁に出す嬉しさと寂しさに加え、このようなことも背景にあるのだろうか。この曲が少し変形したような《南部長持歌》や冒頭から「蝶や花」が出てくる《秋田長持歌》《加賀長持歌》も聴き比べよう。うって変わって《八木節》(群馬県)で「花や蝶や」と育てられるのは国定忠治である。

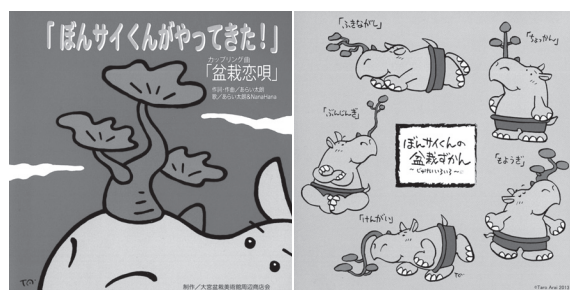
蝶には「新民謡」に属す奄美大島の<sup>あやはぶら</sup>《綾蝶節》もある。綾蝶とは美しい娘を指す言葉だそうで、鳥から出ていく美しい女性に早く戻って来いと歌っている。蝶を女性に喩えるのは《お山コ三里》(秋田)で、「花が蝶々か、蝶々が花か」と歌うのは《佐渡甚句》である。《越中おわら》で富山の街の灯に飛んでいきたいのは「灯とり虫」(ヒトリガ)だ。

鳴く虫の曲では、宮城の《新さんさ時雨》での「鈴ふる虫」、宮城の《おいとこ節》の「こおろぎ 鈴虫きりぎりす くだをまく」である。「くだをまく」とは「クダマキ」のことだろうか。「クダマキ」は「クツワムシ」の古い名前前で、果樹の害虫として問題となることがある

面白い名前前のクダマキモドキは外観がクツワムシに似ていることからきている。《淡海節》では萩、桔梗で鳴く秋の虫の声、《五木の子守唄》(熊本)では裏の松山で蝉が鳴いている。富山の《古代神》は山椒の樹に巣を作った羽根が4枚、足が6本あるアシナガバチに刺されたとき歌うユーモラスな曲だ。

蚕の曲は落とせない。典型的な労作歌である蚕の曲には《秋父音頭》(埼玉)、小林邦夫作詞、西条八十補作詞、町田佳聲作曲の《信濃よいとこ》(長野)、野口雨情作詞、中山晋平作曲の《中野小唄》(長野)があり、かつて養蚕が盛んだった富山県八尾の《越中おはら節》にも若い女性の養蚕作業をうたう部分がある。蚕の曲では正木不如丘作詞、中山晋平作曲の《千曲小唄》(長野)が千曲川の河原で光る蚕を歌う。富山県八尾の《風の盆》の女踊りは女性が蚕と戯れる様子を表したものだと言われる。

民謡に含めてよいかどうか迷うところだが、さいたま市にある世界的に有名な「大宮盆栽美術館」で求めたCDに《盆栽恋歌》とともに収録されている《ほんさいくんがやってきた!》では「悪い虫には気をつけて」と害虫が歌われているのが珍しい。悪い虫とはコガネムシの幼虫だろうか。2曲とも、あらい太朗氏の作詞作曲で、とても面白い。民謡の世界でもいろいろな虫が人々の暮らしにかかわっていることが歌われているのは面白かった。



《ほんさいくんがやってきた!》のCD  
制作/大宮盆栽美術館周辺商店会